

# 軽井沢新聞

June  
2020



編集局 Tel.0267-46-3001 Fax.0267-46-3880  
〒389-0111 長野県軽井沢町長倉 2380-27

身近な情報を編集局までお寄せ下さい ● E-mail info@karuizawa.co.jp  
広告に関するお問い合わせ ● 株式会社アドエイド Tel.0267-46-0055

## 軽井沢人 物語



編集者

那須由莉さん

胸いっぱいの思い出とともに  
信濃追分駅舎で暮らし15年

小学5年生のときに父が山荘を建てて以来、追分との関わりは60年以上。いくつもの思い出が心に残っている。夏休みに遊びに来た小学校の学級担任を、父に言われ提灯を持って信濃追分駅まで迎えに行った。「なぜ懐中電灯ではなく提灯」と疑問だったが、「迎ひに行かう 小さい 提灯をつけて…」という詩人・立原道造の手紙を再現した、父の演出だったとあとからわかった。

「立原が好きだった先生はとても喜んでくださったけど、途中で灯が消えちゃった。真っ暗な帰り道が怖かったのを覚えています」

総合出版社「主婦と生活社」を経て、50歳で編集企画会社を設立。「暮らしの手帖社」から依頼され2005年、別冊『あたらさん』の編集長に。無人駅となり、荒れ果てていた信濃追分駅の駅長室を借り、編集室にした。

駅舎の活用には「野の花が咲き香る、幼い頃に見た駅に戻したい」という思いもあった。地元のボランティア「オオヤマ桜を守る会」に入り、軽井沢で育った植物を持ち寄って手入れを続けた。今では春から秋にかけ、野バラやワレモコウなどで彩られる駅に生まれ変わり「その夢だけ

は叶ったなと思っています」。

別冊の休刊後も駅舎を編集事務所として使い、居着いた猫の面倒をみているうち、寝食の場もこちらへ。夫と2人、駅舎暮らしを続けている。

「関西方面へ取材に行った帰り、篠ノ井駅まで来ると、家に着いた気分になる。もうしなの鉄道が我が家みたいになっている」

70歳を過ぎ「体力があるうちに身の回りの片付けを」と、15年間慣れ親しんだ駅舎を9月に引き払う。その後も東京と行き来しながら、追分の地域活動は継続していく。93歳で亡くなる直前まで一線で働いた、暮しの手帖社の元社長、大橋鎮子さん(1920-2013)を見習い、生涯編集者を貫くつもりだ。

「東日本大震災のあとにお会いしたとき『こんなときこそ出版よ。出版は人を力づけるわよ』って。それを聞いて感動して、もうずっと続けようと思っちゃった」

信濃追分駅舎が建築から100年を迎える2023年には「ささやかでもお祝いしたいですね」。

駅舎がこの先も、来訪者に緑の高原の風を運んでくれることを願っている。

新型コロナウイルスの影響を受けている町内の事業者を元気づけようと、有志による軽井沢応援キャンペー「遠くに行けない今だから#地元軽井沢を体験してみた」が6月10日から始まった。この機会に町民や別荘民、近隣市町村の人たちに地元・軽井沢の魅力を知つてもらい、利用を促す。飲食店や宿泊、レジヤー施設など約70軒がキャンペーンに参加、個々に特典サービスを用意している。発起人の一人で株式会社ファーリルド・マネジメントの代表・大雲芳

は叶ったなと思っています」。

別冊の休刊後も駅舎を編集事務所として使い、居着いた猫の面倒をみているうち、寝食の場もこちらへ。夫と2人、駅舎暮らしを続けている。

「関西方面へ取材に行った帰り、篠ノ井駅まで来ると、家に着いた気分になる。もうしなの鉄道が我が家みたいになっている」

70歳を過ぎ「体力があるうちに身の回りの片付けを」と、15年間慣れ親しんだ駅舎を9月に引き払う。その後も東京と行き来しながら、追分の地域活動は継続していく。93歳で亡くなる直前まで一線で働いた、暮しの手帖社の元社長、大橋鎮子さん(1920-2013)を見習い、生涯編集者を貫くつもりだ。

「東日本大震災のあとにお会いしたとき『こんなときこそ出版よ。出版は人を力づけるわよ』って。それを聞いて感動して、もうずっと続けようと思っちゃった」

信濃追分駅舎が建築から100年を迎える2023年には「ささやかでもお祝いしたいですね」。

駅舎がこの先も、来訪者に緑の高原の風を運んでくれることを願っている。

## 軽井沢応援プロジェクトスタート

遠くに行けない今だから、地元体験を



参加店舗、受けられるサービスの詳細は本紙4・5面に掲載している。

树さんは「日頃、ちよつとよそ行きな街沢。これを機に、地元の方にもっと身近に感じて、利用してもらいたいと、声をかけさせて頂きました」。

参加店舗、受けられるサービスの詳細は本紙4・5面に掲載している。

树さんは「日頃、ちよつとよそ行きな街

沢。これを機に、地元の方にもっと身近に感じて、利用してもらいたいと、声を

かけさせて頂きました」。

参加店舗、受けられるサービスの詳細は本紙4・5面に掲載している。

树さんは「日頃、ちよつとよそ行きな街

沢。これを機に、地元の方にもっと身近に感じて、利用してもらいたいと、声を

かけさせて頂きました」。